

歳晩礼拝 2020年12月27日（日）

題 『幼子を抱くシメオン』

テキスト：ルカ2：25～32

神さまの導きの中、アドベントの日々を過ごし、クリスマス礼拝・祝会またクリスマスイヴの礼拝を恵みの内に与えられ、主イエスの誕生を共にお祝いできましたことを嬉しく思います。教会歴ではクリスマスの期間は、12月25日から新年の1月6日までです。この日は、昔から、当方の博士たちが嬰兒イエスを拝みに来た日とされています。今年最後の礼拝も、新しい年も主の光に包まれた私たちにとりましてはクリスマスの光に包まれて迎えることとなります。

今日は歳晩礼拝で、2020年最後の主日礼拝です。今年は、コロナの年だったと思えますが、息の詰まるようなことも多かったですが、このような時でしかできないこと、考えたこともおありだったことだと思えます。今年のすべてを感謝して、神さまに委ねる信仰を与えられたいと願います。

お一人お一人の上に神さまの祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。主にある希望を持って共に新しい年に向かいたいと願います。

ところで、昔、四国の松山に住んでいる30代の頃、付属幼稚園の園長をしていた時、毎朝、園児をお迎えするため門の前に立っていました。現在は門の前には横断歩道があり安全対策でもあったのです。現在は修禱館、牧師館の前の横断歩道で通学の小学生を毎朝、安全のためにボランティアの方々が見守ってくださっています。見る度に昔のことを思い出しています。

その幼稚園の門の前を近所のおじいさんが毎日小さな犬をだっこしながら散歩されていました。「おじいさんは、小犬をかわいがっているのだな。小さな生き物が好きなんだな」と思っていたのですが、ある時気がついたので。あのおじいさんは、実は小犬に支えられて生きておられるのではないかと。

さて、今日の聖書には、シメオンというエルサレムに住む老人がでてきます。年齢は分かりませんが、聖書の中ではここだけにしか登場しませんが深く心に残る人物です。ちなみに、シメオンという言葉には、＜神が聞いたもうた＞という意味があります。神さまが聞いてくださった、とはまさに今日の聖書箇所の内容そのものなのです。

25節、26節：「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。」とあります。

＜シメオンはイスラエルの慰められるのを待ち望んでいた人＞でした。時代は、イスラエルがローマ帝国の支配のもとにあった時のことです。ローマ帝国の支持を得ていたイスラエルの権力ある立場の人々は、現状の体制を認め、あるいは、しかたなく受け入れていたでしょうが、イスラエルのローマからの解放を願っていた人々も多くいました。

シメオンは自分の長い人生の中で、多くの悲しみを見てきた人だったように思うのです。社会の中に、人間の中に、いや自分自身にさえ深く絶望した事もあったでしょう。しかし、その苦しみや悲しみの中で、それらの苦しみ・悲しみを蓄え、その中で一途に神を見上げて、神に希望をおいて、未だ（いまだ）見えざるものを待望して生きる人でもあったように思えるのです。私たちは、＜慰めを待ち望みつつ生きる老人シメオン＞のことを覚えておきたいと思います。

聖書はこのシメオンと乳飲み子イエスとの出会いを感動的に伝えています。聖書によればそれはちょうど、イエス誕生後、律法の規定に従って父ヨセフと母マリアがエルサレムの神殿にきたときのことでした。この時代、イスラエルでは長男は神に捧げるという考えが支配的だったのです。

27:シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

これはジャストタイミングといいますか。ぴったりのタイミングでした。

この出会いには、人間の常識を超えた意味がありました。まさに神の備えられた時であったのだと思えるのです。

シメオンにとっては人生の旅路の終りの時における重要な意味を持たらす出会いでありました。神を信じて生きる者には人生の終わりにすばらしいことが待っているのです。信頼と喜び、感謝と安心に満たされる時です。わたしたちにも、このようなことは起こるのです。一人ひとりに神さまの備えられた時があるのです。

シメオンは神をたたえて言います。29～32節「主よ、今こそあなたは、おことばどおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦

人を照らす啓示のひかり、あなたの民イスラエルの誉です。」と。

この言葉は、旧約聖書の預言者イザヤのことばです。預言が成就するまさにその時にシメオンは出会い、立ち会ったのです。いや神さまによって出会わされたのです。「万民」とは、全人類のことです。イエスさまは全人類の救いのためにこの世に来られたのです。

シメオンは乳飲み子イエスの中に、**約束されていた全人類に対する神の救いを見たのです**。「わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」長く待ち望んでいた者に慰めの時がついに来たことを彼は証言しています。

シメオンという言葉の意味は、＜神が聞きたもうた＞ということでした。

神は長く、嘆き苦しみの中に生きる人々の求めを、祈りを捨ててはおかれなないのです。聴かれたのです。これは、イスラエルの歴史の上に、それゆえシメオンの人生の上に神の約束が実現したことを告げているのです。シメオンは長く待ち望んだ神の救いを目撃することができました。このような人は何と幸いなことでしょうか。これは、シメオンだけのことでしょうか？いや、わたしたちにとってもそうなのです。

人の幸せは、何をやって来たか、能力や業績では決まらないのではないのでしょうか。出会いの中や、歩んで来た道を振り返り、「これでよかったのだ。」と思える人は感謝できる人は幸いなのだと思います。それは神さまによって与えられた新しくされた心です。

最初にお話しした幼稚園前を子犬を抱いて散歩していた老人も、子犬を通して神さまからぬくもりを日々与えられていたのではないのでしょうか。

わたしたちは、イエスさまによって、罪ゆるされ、死の不安から解放される恵みを与えられ、安心と喜び、信仰と感謝と希望を与えられているのです。そして自由に愛に生きる道を教えられているのです。生きてよいのです。

私たちもこのクリスマスの時に、神さまから心に温かいぬくもりを頂いた者達として来るべき年を迎えたいと願います。

◆神殿で献げられる

- 22:さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、
両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。
- 23:それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。
- 24:また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。
- 25:そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。
- 26:そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。
- 27:シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。
- 28:シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。
- 29:「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。
- 30:わたしはこの目であなたの救いを見たからです。
- 31:これは万民のために整えてくださった救いで、
- 32:異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」
- 33:父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。
- 34:シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。
この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。
- 35:——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」
- 36:また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、
- 37:夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、
- 38:そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。